みやこ町歴史民俗博物館

博物館だより

MIYAKO TOWN DIGITAL MUSEUM
www.miyako-museum.jp

No.123

平成29年2月1日
みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL0930－33－4666
FAX0930－33－4667

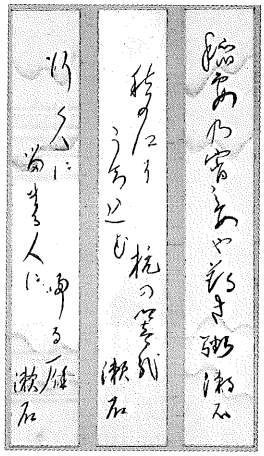
博物館新展示・ここに注目！
小宮豊隆資料「漱石コレクション」Vol.10

今年は夏目漱石生誕150年。没後100年の昨年に続き、文豪ゆかりの事物は注目の的で、博物館所蔵の「小宮豊隆資料」もその一つです。漱石の愛弟子で町出身の文芸評論家が愛蔵した、漱石ゆかりの逸品をご紹介します。

●夏目漱石自筆短冊（3点） 明治43～44年

漱石は畏友・正岡子規を師と仰いで俳句を学び、漢詩と共に彼の心情表現として盛んに句を作りました。生涯に二千五百余の句作を重ね、自身の人生や所縁の人々に画期が訪れた際の句には印象的なものが多く、人間心理の巧者らしい特徴です。

ここに紹介の三句が作られた時期はいわゆる『修善寺の大患』直後で、臨死体験を経て小説の作風にも変化が生じたと言われているのですが、そのことは俳句もまた然りだったようです。殊に吐血後、帰京して主治医のいる長与胃腸病院へ入院し、治療のお礼を述べようとした時、信頼していた院長・長与称吉が病死していたことが判明。因果ともいえる命の交錯に無常を感じ作った句③が、死の病に侵された子規との別れに贈られた句（行く我にとどまる汝に秋二つ）に酷似しているのは象徴的です。



①明治44年9月 再入院先
稲妻の宵々毎や薄き粥

②明治43年9月 病床で
秋の江に打ち込む杭の響き哉

③明治43年10月 病室で
逝く人に留まる人に来る雁

▲自作の三句（上）とその翻刻（下）

◆第11回「みやこ町三重塔まつり」2/26日開催

歴史と文化に彩られたみやこの里に春の到来を告げる、地域や有志一体となってのまつり「みやこ町三重塔まつり」が今年も以下の内容で開催されます。

梅の香ただよう春の国分寺境内で、子どもたちの感性豊かな俳句を愛でながら、句作や野点、護摩焚きなどの伝統文化体験で一日を過ごしてみませんか。

▲27年度のまつり（28.2.28開催）のようす

★まつりメニュー&スケジュール（10～15時）

○午前の部：まつり開会式など
・開会式および少年少女俳句大会入賞者表彰式（10：00～）
・句会（成人の部／於：国分公民館）
・出店（野菜・加工品・豚汁など）
・野点（文化協会／有料）

○午後の部：護摩焚き行事など
・山伏問答など（13：00～）
・火渡り（14：30～）

※出店や野点等は午後も行われます。
※雨天時は内容等変更して行います。

講座・教室・催し物ガイド

◆2月の歴史講座

【漢詩紀行講座】 2月4日（土） 9時30分～
【古文書講座】 2月11日（土） 10時00分～
【古典かな講座】 2月18日（土） 9時30分～
【みやこ学講座】 2月25日（土） 10時00分～

※見学会等は別途ご案内します。
※日程等変更となる場合があります。

◆文化遺産ボランティア養成講座

今回の講座は現地見学会で、ガイドボランティア先進地・太宰府市を訪ねます。

ガイドの実際や運営上の留意事項などを、現地で実践を重ねてこられた先達の皆さんの技と声を通して実地に学びます。

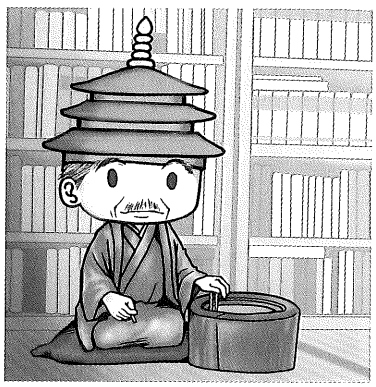
・日　時：2月18日（土）
　9：00～16：00
・場　所：太宰府展示館ほか
・参加費：500円（使用料等実費）
・申込先：博物館（33-4666）

12月の業務日誌から

12月17日（土）、添田町英彦山を舞台に歴史講座・ボランティア講座合同の現地見学会が行われました。英彦山を愛し、多くの人に知ってもらいたいという熱意あるスタッフの説明には皆さん感心しきりでした。

12月18日（日）、博物館を舞台に、第14回「みやコン」が開催されました。当日は、応募のあった男女が町の歴史で会話をはずませていました。博物館が、新たな出会いの場となった素敵な一日でした。

▲かつての宿坊（松養坊）内で英彦山の歴史に耳を傾けました



▶博物館の新たなキャラクター？「みやコン」で登場した小宮豊隆に扮したみやっこ君

みやこの歴史発見伝94
みやこ町の古い地名5
犀川地区2

今回は犀川地区の古い地名の二回目です。

本庄

本庄は今川と高屋川・喜多良川の合流地に立地します。

地名の由来は、荘園の業務を司る所か、庄官の住居がある所を本荘と呼んでいたので、これが転じて本庄と呼ぶようになったという説があります。

山鹿

山鹿は本庄の西方で、今川の東岸に位置します。

地名の由来は、『京都郡誌』に「北より望めば山辺にさし出たる村なれば、鹿は替え字にて、元は山家なるべし」とあります。

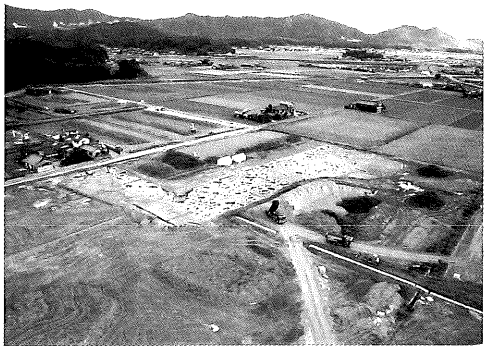
古来、西郷谷の鎮守生立八幡の祭礼の山車に親車を出す村であることから、早くから開けた裕福な村だったようです。

大熊

大熊は本庄の南方で、喜多良川のやや上流に位置します。

地名の由来は、西郷谷から見て大きく南に入り込んだ隈に立地し、はじめ大隈と称していたのが、のちに大熊に転じたのであろうとされています。

圃場整備に先だって発掘された大熊条里遺跡では、弥生時代に今川中流域の拠点となっていた集落が調査されました。


▲大熊条里遺跡

喜多良

喜多良は大熊の南方で、喜多良川の上流に位置します。

地名の由来は、中世に宇佐弥勒寺喜多院領の記多良野別府があったことから、宇佐の喜多院の名を取った地名ではないかと考えられています。

鐙畑

鐙畑は喜多良川の最上流で、蔵持山の南西に位置します。

地名の由来は、この地域は焼畑農業を主とした農耕が行われていたので、山地の地名に多い畑に鞍用山（蔵持山）の鞍に対して鐙を使って鐙畑としたという説と、「アブミ」は「アシフミ」の略で急崖などの狭い地形を意味し、「アシフミ」の「シ」が脱落したものという説があります。

崎山

崎山は町内では今川の最上流に位置します。

田川郡境の石坂峠付近の流路は元はふさがっていて上流の水は遠賀川に流れていましたが、東方にさき（裂）開かれて今川になり、この地名が生まれたという説があります。

柳瀬

柳瀬は崎山の北方で、今川の下流に隣接します。

柳瀬は江戸時代には簗瀬と書かれ「やなぜ」と読まれていました。地名は今川に魚を採る簗がかけられていたことに由来するとみられています。

大村

大村は今川を挟んで山鹿の北方の対岸に位置します。

地名の由来は、神功皇后の従卒が慕い来てようやく会うことができた地だから「オオ」といわれるようになったとか、西郷谷の中心的な集落であることから「オオ」とされたとも、また「オオ」は麻の意でその産地を意味するという説もあります。

大坂

大坂は大村の西方で、飯岳山（大坂山）の南麓に位置します。

地名の由来は、『京都郡誌』に「当郡ヨリ田川郡ヘ越ル大坂路地ナリ。田川ノ方モ山足里ヲ大坂ト云。コレ古代両肥筑ヨリ豊後ヘ通フ大道ナルベシ」とあります。大坂山南方の鞍部は中世の重要な峠で、大坂は重要な峠を意味する地名でもあります。

生立

生立は今川を挟んで本庄の北方に位置します。

地名の由来は、神宮皇后の御子応神天皇がこの地で石を持って立ったので生立と名付けたという伝承があります。

生立八幡神社山笠は県指定の無形民俗文化財で、同神社の木造僧形八幡神坐像も県指定の有形文化財です。

▲生立八幡神社山笠

谷口

谷口は生立の北西の沖積地に隣接しています。

地名は大坂峠に入る谷の入り口であることから生まれたものと考えられています。

木山

木山は谷口の北東に隣接します。

地名の由来は、『京都郡誌』に「此西郷ノ里中ニテ木ノ生繁リタル屋上ニ寄添タル人家ナレバ、自然カク名負シ也」とありますが、背後の御所ケ岳は神籠石の石塁がその中腹を取りまく山であるので、城山が木山に転じたともみられます。

七世紀末の白鳳期にはこの地に古代寺院（木山廃寺）が建立されました。

花熊

花熊は木山の北東で、馬ヶ岳の南麓に位置します。

地名は鼻隈に由来し、鼻は突出、隈は曲がった所の意味があります。今川に突出した地形に由来する地名とみられます。

天正十五年（一五八七）豊臣秀吉から豊前国六郡を拝領した黒田官兵衛は馬ヶ岳城跡を本城としました。現在城跡は町の史跡に指定されています。

（末永弥義）